中國デカメロン

村松梢風

中國デカメロン

昭和三十二年十一月十五日　發行
昭和三十三年　四　月二十日　再版

定價二八〇圓

著作者　村松梢風
發行者　車谷弘
印刷者　長久保慶一
發行所　文藝春秋新社
東京都中央區銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

印刷　大日本
製本　矢島

萬一落丁亂丁の節はお買求めの書店又は發行所にてお取換致します

© 1957 Shofu Muramatsu　Printed in Japan

中國デカメロン

中國デカメロン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

長安のたそがれ

章子厚 字(あざな)福昌は、終日の讀書で疲れた頭を休めようと思って、夕方から下宿を出て賑やかな街の方へ歩いていった。春も終りに近く池畔の柳が青々と繁った枝を垂れていた。いつも行き慣れた東安門街へ出た頃は陽はすでに沒して、西の空にだけまるで血の滴りそうな雲がいくつも浮かんでいて、その方を向いている人の顏が赤く染っているように見えた。朱塗の手すりをめぐらした大きな料理店だの、彫刻をした金色の看板を無數にぶらさげてある藥屋だの、布地を山と積み上げてある呉服屋だの、金銀の細工物を商う老舗だの、そういう立派な店がまるで極樂世界の建物か何かのように夕ぐれの光線の中で輝いている町を、人や轎(かご)や、荷物をはこぶ牛車が「えいえい」とかけ聲をあげて忙しく動いていた。いま時分こうして街を散歩するのが彼の日課でまた樂しみの一つにもなっていた。政府の試驗を受けるために遠い地方からこの長安の都へ出て來てまだ一と月餘りにしかならない章子厚にとつては、見るものすべてが珍らしく、驚異の種ならざるはなく、こうした意味のないそぞろ歩きからうける刺戟でも、若い血潮が湧き立つようで、華やかな都會生活に對する

讃美の念が起るのであつた。

突然彼のうしろから幾挺かの綺麗な轎が續いて來た。前後にも左右にも供廻りがついて見るから美々しい行裝であった。章はあわてて道を避けて、ぽかんと立って行列を眺めていた。幾つもの轎が彼の前を通った。と、いちばん最後の轎の引戸が五寸ばかり開いていて、そこから、髮飾をつけた厚化粧の美しい女の顏がのぞいていたが、章の眼と女の眼とが合うと、女はにっこりと盪けるような笑顏を見せた。章は思わず恍惚となって、殆ど無意識に轎と並んで歩き出した。歩きながら横目をつかって見ると、轎の戸は以前よりよけいにあいて、そこからよく見える女の顏と眼がしきりに動いていた。それは「いっしょについて來い。」といっているように見えた。濃艶な女の魅力と章自身の好奇心とがいっしょになって、彼はどこまでも轎についていった。どこをどう歩いたか分らなかった。いつの間にか藍色のたそがれが漂い始めて、淋しい屋敷町へ來ていた。

突然轎はピタッととまって地におろされた。章も思わず足をとめると、女は手で彼をさしまねいた。章は吸い寄せられるようにそばへいった。

「これへお乘んなさい。」

女は轎の戸をいっぱいに開け、自分の體を片方へ寄せて、早く早くと眼で知らせた。章子厚は何事も思慮する餘裕もなく力まかせにうしろから押されているような氣もちで慌てて轎の中へ這い込んでいって女と並んで腰をおろした。すると誰かが外から轎の戸を閉めたと思うと、轎は忽ちかつ

ぎ上げられて動き出した。章のからだはぴったりと女にくっついていたがそれでも轎の中は寸分の餘りもなかった。女のからだからはえもいわれぬ芳香を放っているので章はむせ返りそうだった。それは印度人が輸入する不思議な花からとる香料に相違なかった。轎の中が暗いのと、女と自分の距離があまり近すぎるので女の顔はかえってよく見えなかったが、章は本能的に女の美しさを見てとった。彼がこらえきれなくなって手をやると、女はかすかに「ほゝ」と笑って柔かな腕を章の首に卷いて引き寄せた。章子厚は童貞でまだ女の味は知らなかったが、男がこういう場合に女に對してどうするものだかということは誰に教わらなくても知っていた。彼は赤ん坊が乳を吸う時のように、片手でふくらんだ女の乳房を着物の上から握りしめながら、女の口を吸った。女もはげしく吸い返した。そうしているうちに章は自分のからだに異常な感覺をおぼえた。彼はぐったりと夢心地になって女の胸に顔を埋めているうちに轎は地におろされたのであった。轎の戸が外からあいた。

「お降りなさいな。」 女は靜かな聲で云った。

章子厚は轎の外へ出た。女も續いて出た。もうほとんど夜になっていた。眼の前に大きな建物が立っていて、高い壁が外界を遮り、そこは石を敷いた廣い中庭のようであった。まだかすかに殘照のある大空が不氣味に頭の上にひろがっていた。一緒に來たはずの幾つもの轎はどこへいったのか一つも見えなかった。どこかで人聲が聞えるが人の姿は見えなかった。

「こちらへいらっしゃい。」 女はそういって章の手を取って誘った。章は自分の身に起ってきたこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

の怪奇な出來事について深く考えてみる力を失っていた。しばらく多少の疑惑や不安があるにしても、女の誘いを斷ることはできなかった。轎の中のことを考えると、彼はまだ心殘りでこの女のそばを離れる氣にはならなかった。彼は飼い犬のように從順に女について行くよりほかはなかった。それは驚くべき廣大な邸宅であった。邸宅というよりも宮殿というほうがあたっているくらいであった。幾棟かの大きな建物の中を通ったり、大きな泉水のほとりに出たり、こんもり繁った樹木が立っている庭の中を通りぬけたり、そうかと思うと外側の壁と壁に挾まれた長い通路を通ったり、いったいどこまで行くのかとさすがに章子厚も途中で不安になってきた。するとすぐに彼の氣持を見抜いたかのように女は汗ばんだ手で更に固く章の手を握っていった。

「もうすぐですからご心配なさるには及びませんわ。」

やがて一棟の奥まった部屋へ章は連れこまれた。燈火が明るくともっていてちょうど人が來るのを待っているようであった。章は物珍らしげに室内を見廻した。廣い床には足がすくみそうな美しい敷物が敷き詰められ、まん中の卓には燃え立ちそうな紅い絹の布が掛り、同じ色をした美しい椅子が兩側に据えてある。あたりには紫檀黑檀の机や棚が置かれ、そこには金銀をちりばめた幾つもの道具が飾ってある。壁にかけた名畫はだれの筆であろうか。また一方を見ると、そこには象嵌の裝飾を施した立派な寢臺があって、眞紅の帳がしっとりさがっている。眼にふれるものすべて章子厚が初めて見るような物ばかりである。

女は章子厚を椅子にかけさせ、自分も一方の椅子にかけた。章ははじめて女の顔を眞正面から見ることができた。まる顔で、鼻もややまるい方だ。眼は黑くいきいきと動いて、唇は紅く小さかった。轎の中から覗いていた時ほど夢幻的ではないが、素晴しい美人で、何よりも、章はそのふっくらとした肉體に魅せられた。彼はすぐさま激しい愛慾を感じたが、轎の中とちがってここではそんなことをしてもよいかどうかと躊躇った。同時に彼は何か不安を感じた。

「ここはどこですか。」

「そんなことどうでもよろしいじゃありませんか。それよりもあなたおなかがお空きでしょう。ただいますぐご飯をさしあげます。」

女の言葉が終るか終らぬうちに入口の戸が開いて召使いの女が二人で料理をはこんで來て卓の上に並べた。二つの盃と銀の酒器を置くと召使いの女は默って退っていった。

「あなたお酒召し上れ。」

「僕、酒は飲まないんです。」

「これは外國から來たお酒で、お藥ですから少し召し上れ。」

といって女は章子厚の盃と自分の盃に琥珀色の葡萄酒を注ぎ、盃を手に持って差し上げた、章子厚も仕方がないから盃を持って一と口飲むと、なんともいえぬ味だったのでぐっと飲み干した。するとそのあとの神氣爽快さは譬えようがなかった。料理はいうまでもなく山海の珍味ばかりである。

女は自分もよく食べたが箸で章子厚にとってくれるので彼も後には遠慮なく食った。その間に女は時々葡萄酒をすすめることを忘れなかった。

「まだ貴郎のお名前を伺いませんでしたわね。」

「章子厚です。字は福昌ですが。」

「お宅に夫人いらっしゃるんでしょうね。」

「そんなものありません。僕は都へ試験を受けに來た書生です。」

「おやそう、じゃ、御郷里は。」

「四川の龍州です。あなたのお名前は。」

「わたし、玉香——」女は扇を口に當てて答えた。

章子厚はもうたらふく御馳走を詰めこんだうえに葡萄酒を飲んだのですっかりいい氣持になってしまって、先刻までの不安はどこかへケシ飛んでしまい、すこしでも早く目の前の素晴しい幸福をつかむことで心は一ぱいになっていた。思わずよろめくように立って玉香のそばに行くと、女も同時に立って、

「さあ、あちらへ參りましょう。」

と章を寢臺の方へみちびいた。章はどうしたらいいか實はわからなかったが、女は心得たもので、寢臺の帳を片方へ引きよせて章を腰かけさせると、まず靴を脱がせた。それから女も髪飾をとり、

次に着物をすっかり脱いでしまってから、翡翠の耳飾から黄金の腕輪までとって、それらの品物を丁寧に側の臺の上に並べておいた。その間かなりの時間があったので章は雪のように白い女の肌をながめながら心を矢竹にはやらせていた。女はゆっくり支度をしてしまうと章の方を見て嫣然(にっこ)りと笑って、

「お待ちどおさま。」

といった。章の魂は天外に飛んでしまい、それからは後は無我夢中だったが、しかし彼はただ女がするようにしていればよかった。やがて窓からうっすらと明け方の光がしのび込む頃になると章は死んだように眠ってしまったし、女は章の方へ背中を向け片手と片足を寢臺の外へ投げ出したまま疲れ果てた風で熟睡していた。

章子厚はどれくらい眠ったか自分ではわからないが、眼をさました時は室内はうす暗くて日暮のような感じがした。寢臺の上には自分ひとり寢ていた。彼は昨日の夕方からの出來事を回想してなんだか夢を見ているような氣もちがしたが、この寢臺といい立派な部屋といい明らかに自分の下宿ではない。それではまだ夢の續きを見ているのかしらと考えてみたが、そうではない現實である。

彼が身を起してシャツとズボンだけ着けた時、まるでそれを見ていたように昨夜の一人の召使いの女が洗面の湯と漱(うがい)の水を持って入って來た。彼は壁際のテーブルへいって顏を洗い漱いをした。それから着物をきちんと着けて椅子に腰をかけていると下婢が一椀の杏仁湯(きょうにんとう)を彼の前に持って來た。

早速手にとって一と口飲むと、その香りといい味といいなんともいわれなくて、忽ち生氣を回復したような心地がした。

「玉香さんはどうしましたか。」

「じきにお見えになります。」

下婢は無表情に答えて出ていったが、すぐに又一椀の燕の巣と、粥と、くさぐさの朝の食物をはこんで來た。章は猛烈に空腹になっていたので、まず燕巣をすすり、それからうすい粥をのんだ。食事が終ったとたんに玉香が昨日とはちがうきれいな服を着て、こってりとお化粧をし、髪飾もきらびやかで、眼のさめるような姿を現わした。

「あなたはよくお寝みになりましたこと。」

「玉香さんはいつ頃起きたんですか。」

「妾は用事がありますからそう寝てはいられませんわ。」

一夜の情交はふたりにすっかり親しみをもたせた。それにしても章は自分のおかれている境遇に對して不可解でならなかったから昨日と同じような質問をした。

「ここは何處で、そして貴女はどういう人ですか。」

「そんなことお訊きになるもんじゃありませんわ。貴郎はここがお厭ですか。」

「厭じゃありません。」

「それなら默っていらっしゃればいいのよ。あまり餘計なこと考えない方がいいわ。」

そういわれると章子厚もそうかも知れぬと思った。何事でも時間が解決してくれる。いずれは事情も知れるに違いない。まずそれまでは自分に與えられた幸福を享受していればいいのだという氣もちになった。すると彼は忽ち勃々たる慾情を感じた。彼が誘うと玉香はすぐに應じた。章子厚は昨夜の經驗で今日はよほど慣れて來ていた。お椀のように盛り上った乳房、瑪瑙のような可愛らしい乳首、紅い耳朶などが彼の眼を眩惑させると同時に無限の情慾をかり立てた。とかくするうちに夜食の時間が來た。料理は例によって山海の珍味だが、たとえば南洋の海でとれる鱶の鰭とか、蒙古の熊の掌の吸物とか、渤海の鱈とか、章子厚が生れてから一度も見たこともないものばかりだった。玉香もいっしょに食べながら今夜は血のように赤い葡萄酒をすすめた。章ははじめは氣味惡がっていたが、ためしに飲んでみると舌がしびれるほどうまかった。天下の美味を飽食したうえにほんのりと醉いが廻ると章子厚は精氣百倍した。その晩もあらん限りの樂しみを盡したが、最後に正體なく眠りこけてしまうまでは飽くことを知らなかった。

その翌日も同じようであった。こうして章子厚の奇怪な生活は幾日も同じように繰り返された。彼はこの生活を飽きたわけではないが、ふと外の世界が戀しくなってきた。

「僕を下宿へ歸してくれませんか。」

と玉香にいうと、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.